

海に面した松崎町。人口は七千人弱。漁師の方はほとんどいないが、海の幸はとても豊富だ。家から少し歩けば港があり、誰でも気軽に釣りをすることができ。港にはいつも釣り人がいて、中には観光客も見られる。そこから生まれる縁もとてもよいものだと思う。釣れる魚の種類も豊富である。シロギスなどは店頭にも並ばないような魚だが、よく釣れ、天ぷらにするととても美味しい。釣ってきたばかりの魚を、普通の家庭で普段の夕食として食べることができる。このことは、田舎に住んでいて一番幸せなことだと最近強く感じる。気軽に食べられる新鮮で貴重な海の幸、それが我が町の自慢の味だと僕は思っている。

今まで釣ってきた魚の中で一番印象に残っているのは、昨年九月に釣ったオオモンハタだ。聞いたこともない名前魚だろうと思うが、とても貴重な魚で、滅多に釣れない。以前に釣り仲間から聞いたことがあり、自分も

いつか釣ってみたいと思っていた。根魚の一種で、海底の岩場にじっとしている。肉食魚なので、とても脂が乗っているという。太れば太るほど、人に喜ばれる魚だ。

その頃、僕は釣った魚を捌くために、自分の出刃包丁を買って使い始めていた。釣りに上げたオオモンハタは体長四十センチほどあり、それまでに僕が捌いた中では最も大きな魚だった。腹を切ると、内臓からこれでもかというほどの脂肪が出てきて驚いた。身はきれいな白身で、虹色の上品な油が乗っている。刺身にして家族に食べてもらおうと、とても喜んでもらえたことを覚えている。

自分が釣った魚で人を喜ばせられることは、とても嬉しいことだ。しかし、それ以上に嬉しいことは、人を喜ばせられる魚が自分の住む町で釣れるということなのだと思う。

自然に感謝して生きる。松崎町に住んでみると、この言葉の意味とその大切さが本当によく分かってくるような気がしている。

松崎中学校三年
菊地直央（きくちなお）